



3月5、6日に開催された「協同労働・よい仕事研究交流全国集会」の特集号ができあがりました。全体会は600を超えるアクセスがあり、40分散会にも500人以上が参加、一般参加の申し込みも120人以上あったようです。法施行を10月に控える重要な時期に、改めて協同労働の働き方やよい仕事について深め合うことができた時間でした。

とりわけ今回の集会では、全体会の座談会で「気候危機、生物多様性」がメインテーマとなり、私たちの暮らしの基盤である地球環境と生物多様性が今どのような状況にあり、その影響や原因を知り、自分たちには何ができるのかを考える場になりました。ワーカーズコープの協同労働やよい仕事を通じて、持続可能な社会を実現することに寄与するのが労協法の目的になっていますが、地球環境と生物多様性なしには、安心して暮らすことも、働くこともできません。よい仕事の一丁目一番地には、この地球環境と生物多様性があるのではないかと。個人的にはそんな風にも考えています。

このような地球環境や生物多様性について、感謝し行動をしようと、1970年にできたのが4月22日のアースデイ(地球の日)です。レイチェル・カーソンの『沈黙の春』が出版された1962年ごろから、環境問題や反戦運動がアメリカを中心に広がり、1968年にアポロ8号が撮影した、宇宙から見た地球の姿を人々が目にしたことで、地球がひとつの大きな生命圏だという認識と新しい環境運動が起こります。今では日本でも

「アースデイ」というイベントが毎年全国各地で開かれています。

4月16、17日に代々木公園で開催され、2日間で約4万人の来場者があった「アースデイ東京2022」には、首都圏エリアのワーカーズコープが12ブースとミニステージを出展して「ワーカーズコープビレッジ」が誕生しました。協同総研も運営やガイドブックの販売、トークイベント等で関わり、新しい出会いやつながりが生まれました。

地球環境や生物多様性は、関心がないと普段はなかなか接することのないキーワードだと思います。しかし、気候危機の深刻さを考えると、日常的にどんな工夫ができるか、行動の変化を起こすことができるか、このことを私たち一人ひとりが自分ごととして忘れずに考え、取り組み続けることが大切だと感じます。アースデイ東京で、仲間と交流し、別ブースの取り組みをのぞきに行き、井戸端会議で花を咲かせる中で、ものごと(気候危機や貧困などの社会問題)が自分ごとになっていくには、安心して語り合える場所があること、楽しいこと、一緒に考え、行動できる仲間がいることが欠かせないと改めて気が付きました。

夏前には参院選があります。気候危機やエネルギー供給のひっ迫化を理由とした原子力発電の推進や防衛費の大幅引き上げに対して、大きな問題と距離を置くのではなく、自分だったら誰にどう伝えたいかを考え、分かりあうための努力を諦めないでいたいと思います。